

いろいろ生きもの通信

NPO法人 いろいろ生きものネット埼玉

埼玉県生物多様性センターに期待する

生物多様性への認識がやっと高まってきました。昨年10に開催されたCOP15第1部での昆明宣言により、本年開催の第2部では愛知目標に続く「ポスト2020生物多様性枠組」が採択される予定です。経済界でも、気候変動と並び経済に大きな影響を与える課題であるとの認識が広がっています。既に大企業に義務化された気候変動財務情報開示タスクフォース（TCFD）に続く枠組として、自然関連財務情報開示タスクフォース（TNFD）の制度化の準備が進められています。

生物多様性を守るためには、こうしたグローバルな動きをしっかりと受け止め、身近な生態系を守る地道なローカルでの活動を活発化させることが重要です。本県では、この4月、埼玉県環境科学国際センター内に、埼玉県生物多様性センター（以下「センター」という。）がオープンしました。センターは、自然環境や生物多様性に関して、①情報の管理、②保全活動の支援、③調査研究、④教育・普及啓発を一元的に担う組織です。

生物多様性を守るためには、生態系の実態を把握し、変化をいち早く察知することが重要です。従来、県や市町村、大学、環境団体などが様々な実態調査を実施していますが、それらの結果が収集され、十分に活用されているとは言い難い状況です。そこで、まずセンターに期待したいのは、情報プラットフォームの確立と環境団体への支援です。多くの団体にとって、活動の成果を広く発信することはなかなか大変です。センターが、既存の情報手段を縦横に活用し、各種情報の集約と紹介、分類、重要情報の見える化などを徐々に進めていただきたいものです。

環境団体等の保全活動への支援も期待されます。どの団体もマンパワーや機材が十分ではありません。オオキンケイギクやオオフサモなどの侵略的外来生物が大きな問題になった場合、旗振り役となって環境団体に防除活動を呼び掛けていただければと

思います。生息情報の収集、危険性の評価、科学的対策の立案、実施など、生物多様性地域連携促進法に基づく「地域連携保全活動支援センター」としての役割も期待されます。

調査研究では、クビアカツヤカミキリ発見大調査のような市民参加型や参加団体公募委託型の自然環境調査をテーマを決めて継続的に実施していただけないかと思います。

教育・普及啓発事業は、多くの団体が活発に実施している分野ですが、センターを含め様々な連携により一層充実化すると思います。関係者が相互に連絡できる仕組みとして、センターのマンパワーを補完する手段としても、何らかのボランティア組織を作ってみてはどうかと思います。

センターは、まだ走り出したばかりです。徐々に活動を充実させ、県内の生物多様性保全ネットワークの中心になって欲しいと大いに期待しています。
（星野弘志・協坂純一）



第8回生きものフォーラム結果

埼玉の生物多様性保全のさらなる展開に向けて
～生きもの情報の収集・共有・活用を考える～

日時令和4年2月27日（日）13:30～16:30

会場さいたま市産業文化センター（オンライン併用）

参加人数 50人

【プログラム】

■ 基調講演

- 「埼玉県の生物多様性情報とその活用」
いろいろ生きものネット埼玉 嶋田知英
- 「埼玉県植物情報の蓄積」
埼玉県絶滅危惧植物種調査団 牧野彰吾
- 「埼玉昆虫談話会の活動と「寄せ蛾記」」
埼玉昆虫談話会 江村薫
- 「生きものログの運用」
環境省生物多様性センター 秋月亮介

■ 保全活動報告

- 「モニタリング調査による里山の保全」
天覧山・多峯主山の自然を守る会 大石章

今回は、埼玉県植物誌、同昆虫誌、同動物誌など、埼玉県内の団体で豊富な生きもの情報が蓄積されている状況について4人の講師からの講演と2団体からの活動報告をしていただきました。そうした情報の今後の活用について熱心な意見交換がなされました。埼玉県生物多様性センターの役割への期待も出ました。（脇坂純一）

第4回サイエンスカフェ結果

下記のテーマで第4回サイエンスカフェを開催しました。

ムクドリはどんなねぐらがお好き？

—新時代のムクドリ対策案—

スピーカー 植村慎吾 NPO法人バードリサーチ

日時 令和3年11月20日（土）14:00～16:00

方式 埼玉会館会議室とオンライン

参加人数 30人

ムクドリは、最も身近な野鳥で、どこにでも居る在来種ですが、ときに駅前のシンボルツリーや街路樹などに大きなねぐらを作り、糞や鳴き声が問題となり人との軋轢が起きています。

都市のねぐら対策としては、街路樹の強剪定や忌避音を使った追い出しなどが行われていますが、十分な効果を上げているとは言えません。

そこで、ムクドリの研究者である植村様をスピーカーに迎え、ムクドリの生態や、個体数やねぐらの

推移、行われている対策などについて話を伺いました。

ムクドリの個体数は、日本全体では減少傾向にあるものの、都市では増加していることや、どのような樹種でもねぐらを作るわけではなく、特にケヤキを専好し、さらに、ケヤキでも周辺の木と離れているケヤキにねぐらを作る傾向があることなど、対策にも参考になる興味深い話を聞くことができました。

問題解決の方向性としては、完全に追い払うことは不可能なので、人間との軋轢が生じにくい場所への誘致など、ムクドリと妥協点を探ることが重要だとのことでした。

サイエンスカフェには、実際に現場で対策にあたっている行政職員の参加もあり、活発な質疑応答が行われました。（嶋田知英）

第5回サイエンスカフェ結果

第5回サイエンスカフェを開催しました。森林地域への設置が進むメガソーラーの問題点を考えました。

再エネ導入拡大と生物多様性保全の両立は可能か？

スピーカー 荒井 歩 東京農業大学教授

日時 令和4年6月11日（土）14:00～15:30

方式 WEBによるオンライン会議

参加人数26人

メガソーラーへの反対運動は全国で多数生じています。太陽光発電は再生可能エネルギーの主役ですが、一部の再エネ事業の地域社会とのあつれきは極めて大きくなっています。埼玉県内でも小川町などで複数の問題が生じています。環境アセスメントの適用は大規模事業に限られるなど課題もありますが、地域環境を守る一手法であるアセスメントの専門家の荒井先生にスピーカーをお願いし、再生可能エネルギー事業が地域と共生していくための課題を考えました。

テーマが大きくて短時間で煮詰めることは無理でしたが、参加者の皆さんに少しでも考える材料は提示できたのではないかと思います。地域社会の合意形成に関する社会システムの構築が重要だと痛感しました。

また、個人的には一部の意欲の高い方々に環境を守る活動をお任せしてしまっているなど自戒しています。（脇坂純一）

田植え時期が水生動物群衆に及ぼす影響

農地である水田には、実は多種多様な動植物が生息しています。埼玉県においては、県全体面積の約11%が水田であり、生物多様性保全を図るうえでも水田は重要な生態系と言えます。

春になると田んぼに水が入りますが、その時期は地域によって様々です。例えば私の出身地の青森県では、田植えは5月に行います。一方、埼玉県では、水稻の栽培品種や輪作の有無等によって田植え時期は様々です。例えばコシヒカリは4～5月の早い時期に苗を移植しますが、彩のかがやきでは5月下旬～6月上旬頃に植えられます。県北部で盛んな米麦二毛作では、麦収穫後の6月下旬頃が田植え時期です。その結果、同じ県内でも田植え時期に最大2ヶ月もの差が生じることになります。

プランクトン等の餌が豊富な水田は、カエルや水生昆虫等が繁殖場として利用します。しかし、繁殖のタイミングで水が無いと彼らは水田を利用できません。そのため、田植え時期に応じて水生動物の“顔ぶれ”も異なるものになると予想されます(図1)。

そこで、加須市内の田植え時期が異なる複数の水田で、水生動物の掬い採り調査を行いました。ま

ず、田植え日が4月末～5月中旬の水田では、トウキョウダルマガエルの幼生が特徴的に出現しました(図2)。湛水期間と繁殖時期が合致したためと考えられます。また、アカネ属幼虫も早植え水田で多く見られました。アカネ属のトンボは、秋に水田で産卵し、卵は土中で翌年まで休眠します。しかし、水田への入水が遅い水田では、卵が乾燥に耐えられずに死滅してしまうと考えられます。

一方、二毛作水田では極めて多数のユスリカ幼虫が生息していました。麦の収穫後に麦わらを土中にすき込むため、そこから溶け出した栄養塩で植物プランクトンが増え、ユスリカ幼虫の餌となることで多数の個体の生息が可能になると考えられます。さらに、ユスリカを捕食するハイイロゲンゴロウやコマツモムシ等の肉食性昆虫も数多く見つかりました。このように、田植え時期や輪作の有無によって、水生動物の“顔ぶれ”が異なることが明らかになってきました。異なるタイプの水田が混在することで、地域レベルでの種多様性が向上していると考えられます。(安野 翔)

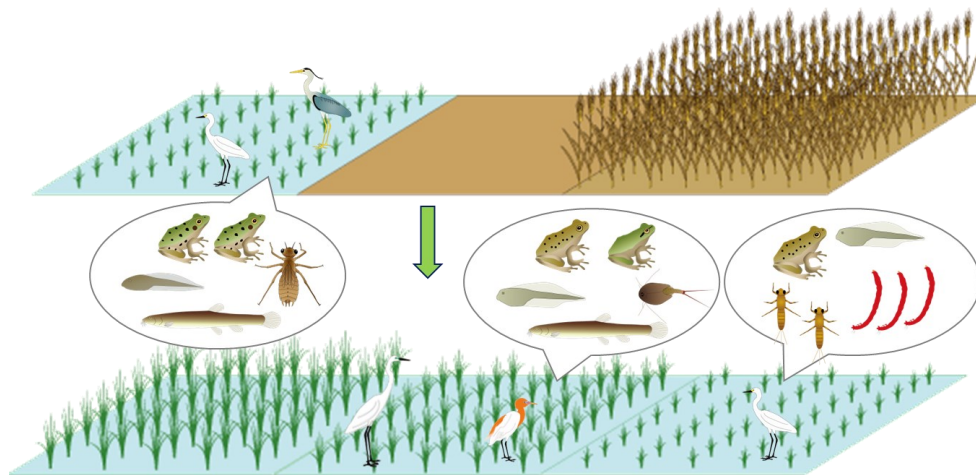


図1 田植え時期・輪作の有無と水生動物群集の関係の模式図



図2 早植え栽培と米麦二毛作で特徴的に見られる水生動物

新たな外来カミキリムシにご注意下さい

ツヤハダゴマダラカミキリという新顔の外来カミキリムシによる街路樹などへの被害が顕在化しています。

『日本の桜が危ない』というセンセーショナルなコピーでも注目を集めている大型美しいクビアカツヤカミキリと異なり、中国原産のツヤハダゴマダラカミキリは国内在来普通種のゴマダラカミキリによく似ており、写真のように黒地に白い斑点を散りばめた地味な中型種のため、虫好きの子ども達でさえ『なんだ、ゴマダラか...』とスルーしてしまう可能性がある種です。

詳細は国立環境研究所の侵入生物データベース
(<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/60310.html>) ですすでに情報公

開されているように“世界の侵略的外来種ワースト100”にも指定されている厄介者で、欧米でも植林地、果樹園、街路樹など様々な樹木に寄生して被害を出しています。

日本国内でも本州各地で被害が報告されており、埼玉県内でも白岡市や松伏町、飯能市での生息情報があります。

(碓井 徹)



ツヤハダゴマダラカミキリ オス 富山県産 写真提供：岩田朋文氏

気になる生きもの

キタミソウ

埼玉県条例で県内希少野生動植物種の一つとして指定されているキタミソウは、ゴマノハグサ科に属する植物で、そもそもは北方のツンドラ地帯に分布し、日本では北海道の北見で初めて発見されたことからこの名前がつけました。現在、国内では、北海道、関東（埼玉県、茨城県、群馬県）、九州（熊本県）とそれぞれかなり離れた地域で生育が確認され、不思議な分布をしています。一説によると、鳥によって種子が運ばれたのではないとも言われています。一方、埼玉県内では、熊谷市、行田市、加須市、さいたま市岩槻区、越谷市、草加市、吉川市、三郷市などの主に東部地域の河川や農業用水路で生育が確認されていましたが、最近になって西部地域の川越市の伊佐沼でも生育が確認されました。このような県内での分布は、どのように種子が運ばれて生じたのでしょうか？キタミソウは、いろいろとわからないことの多い不思議な植物です。

(三輪 誠)



会員のつぶやき

5月上旬に三宅島へ行ってきました。30年前に子供たちと一緒に行きましてのでく々の訪問となりました。今回の訪問はNACSJ絡みでの打合せとスダジイの巨樹を観るためでした。さて三宅島には約3200本の巨樹があり、大半がスダジイです。

何本かのスダジイの巨樹を観ましたが、なんと幹周りが19mもあり、その迫りに驚嘆しました。ご存じとは思いますが、ここでは過去に何回も噴火を繰り返していますが、これだけの巨樹が残っているのにもビックリです。(本間敏文)



いろいろ生きもの通信 No.10

- 発行日 2022年9月1日
- 発行 NPO法人
いろいろ生きものネット埼玉
- 事務局 さいたま市大宮区大門
3-205ABCビル303
- e-mail iinenet.saitama@gmail.com